

『隙間』梗概

解体が予定されたビルと木造家屋に挟まれた狭い路地に男たちの姿があつた。

中年の加藤と二十二歳の松木。年齢に親子ほどの差こそあれ、二人とも非正規雇用の身である。解体工事に伴う振動の影響を調べる為、隣接家屋の工事前調査の段取りの予定が、肝心の現場主任の到着が遅れ、待ちぼうけを食っていたのだ。次第に松木の顔色が青ざめてきた。スマホでラインのやりとりをしているというガールフレンドとの間にトラブルが発生したらしい。元々、松木の恰好や不貞腐れた態度に不快感を覚えた加藤だが忠告することは憚られていた。機嫌を損ねると若手は簡単に現場を途中放棄することを知っていたからだった。そこへ木造家屋の家主の老婆が現れ、改めて調査依頼を申し出るが断られてしまう。逆に加藤は彼女の取りとめのない思い出話に付き合わされる羽目に。亡き夫の思い

出話から浮気のこと、自らの生い立ち、飼った猫や姑のことなど限がない。心証を損ねないよう老婆に気を使う加藤をよそに松木はガールフレンドや新たに現れた男友だちのことで仕事どころではない。主任から到着が遅れると報告があり、天候も下り坂で、焦る加藤に耳の痛い話を続ける老婆。人の心情や過去まで見透かす霊能者のような老婆に気味悪さすら抱く加藤。五十歳を過ぎてもバイトで生計を立てるしかない、失敗だらけの人生を送った加藤。煮え切らない上に、すぐに酒に逃げる弱い性格と、近辺にいる猫や鳩の過去まで想像を膨らましてしまう空想癖のせいだとの自覚はあるものの、その反省は生かされず、相も変わらずの不甲斐ない生活。若い時分に抱いた夢も今では幻。加藤は一度人生を投げ出したこともあった。益々落ち込む松木、勝手にしゃべる続ける老婆の間で、主任の到着を待ちながら加藤はこれまでの人生の紆余曲折を、陰りはじめた空模様を重ねるのだった。